小指探し

サンショウウオ

ふと気づいたときには、なくなっていた。当たり前にある、と思っていたものがなかった。

なんたる失態。自分のことでありながら情けなく、マントルまで穴を掘って、そこに頭からダイブしたくなった。こんな重要な欠陥に気づけないとは、痛覚がないということも考えものである。

「ほんとだ、ないね」

マスターに報告すると、彼女は笑って首をかしげた。

「今まで気づかなかったってことは、そんなに支障はないの？」

「はい、お恥ずかしながら」

「よかった。でも、新しいのを買いに行こうか。老朽化が原因かもしれないから、検査もかねて」

優しくそう問うてくれた彼女に、私はしばし考えてから、首を横に振った。

「マスター、少し心当たりがあって、そこを探してからでもよいでしょうか。眉唾な話なのですが、やれることは全てやっておきたいのです」

私のわがままに、彼女は当たり前のように、優しくうなずいた。

マスターにはああ言ったが、眉唾というのは人づてに聞いた話ということで、実際にそれが存在している可能性は高いと思っていたし、ネットワークを通しての検索で、過去の記録なども閲覧していた。そうでなければ、私はマスターの厚意を断ったりはしない。そういう風に作られているし、そういう風になりたいと思っているからだ。

三十五番街の第九地区。昔は栄えた商店街であったようだが、ほとんどが空ビルとなった今は、その面影はほとんどない。私の目当ては、その中の一つ。小さなビルの三階にあった。

「いらっしゃいませ、お客さん」

ドアを開けた途端に計測する空気中の埃っぽさに、清浄作用が機能する。

「これは珍しい……。高級なロボットさんですね。E01型かな？」

スチール製の机に、錆びたパイプ椅子。そこに人の良さそうな顔をした初老の男が座していた。予想と大分違うたたずまいに、私は表札を確認した記録を見返しながら、彼に問うた。

「はい、E01型1014号・子守用アンドロイドでございます。こちらが遺失部品の捜索を行っていると聞いたのですが」

「はい、そうですよ。私は受付の松田です。小さなところでびっくりしたでしょう？」

松田の言葉に、私はとりあえず黙った。正直な感想を人間が好むとは限らない。ただ、たくさんの部品を陳列させた倉庫のような建物をイメージ図として持っていたことを否定はできなかった。

「部品の倉庫は別の場所にあってね。配送形式でお届けするんですよ。ここは単なる相談所です。お恥ずかしながら、ここで収納するには場所代が高くて……」

「きちんとされてるんですね」

「半官半民の会社ですからねえ、一応は。今じゃあ需要がなくて、ほとんど噂話か都市伝説のような扱いがなされてますが、一応は行政の案で作られたんですよ」

笑いながら手で勧めてくれたパイプ椅子におとなしく座る。キィと鳴る金属に、マスターが嫌がる黒板をひっ

かく音を思い出した。
「それでは、ご相談内容なのですが」
老眼鏡と思われる眼鏡を掛け、記録用だろうノートパソコンを開いた松田は、改めて私に向き直った。
「あなたの紛失された部位を教えていただけますか？」
「はい。この、左足の……」
私は靴を脱ぐと、少し足を持ち上げて、彼に差し出す。
「左足の、小指が、昨日から見当たらないんです」
「なるほど、確かにきれいになくなってるねえ」
私の欠けた指を見ると、松田は首をかしげる。
「けれど、言い方は悪いがあなたは量産型のはずでしょう？　こんな部品をわざわざ捜索依頼をしてもとの物を探すより、新しい部品を買った方が楽ですよ？」
「できればそれはしたくないんです」
「どうしてでしょう？」
松田の直球な質問に私の回路は一瞬止まるが、すぐに口は素直な理由を吐き出した。なぜだか、きちんと言いたい気分だった。
「だって、人間は小指を新しい物に取り替えたりしないでしょう？」

お嬢様に会った日は今でも私の記録の一番深いところに、最も鮮やかな形で保存されている。
「ねえ、あなたが今日から私と遊んでくれるのよね？　そうよね！」
うれしそうに私の手を取り、ウサギのように跳ね回っていた彼女は、少し危なっかしかった。
「うれしい！　私ずっとお友達が欲しかったのよ！」
「お嬢様、ありがたいお言葉ですが、私は友人でも、人間でもありません。子守用ロボットでございます」
「ええ、友達だよう！」
大輪のひまわりに類似した微笑みで、私の合金で出来た手を握ると、彼女は続けた。
「だって、こんなにあたたかいんだもの！」

私の役目は子守ロボット。つまり、「子」がいなくなれば、自然と役目は終わり、不要な存在となる。当然、そのことをわかっていた。
「おめでとうございます、お嬢様」
大人になった証の着物に腕を通し、大人のように背を伸ばして、子どものように笑った彼女は、とてもきれいだった。私が育てた彼女は大人になったのだと、実感した。誇らしいという、およそロボットにはない感情をおぼえた様な気がした。
「その、お嬢様って言うの今日から辞めてね」
なぜか、楽しそうに言うお嬢様に私は首をかしげた。しかし、すぐに思い当たることがあって、素直に頭を下げる。
「失礼いたしました……。本日で子守の任を解かれる分際で軽々しく……」
「マスターって呼んでよ」
「え？」
予測し得なかった言葉に、私は思わず顔を上げる。彼女は悪戯が成功したような顔で笑っていた。
「お父さんから、あなたの所有権もらっちゃった。だから、今日からは私があなたのマスターね。こういうかたちもどうかなって思ったんだけどさー、やっぱり一緒に居るにはこれが一番便利なんだよね」
「あの、それはどういう」
「だからさ、友達で居てよ。今までも、これからもずっと」
照れくさそうな彼女を見ていると、なぜか、私の中にはなかったはずのあたたかさがあふれ出していた。

「彼女の前で、私は人らしくありたいのです。彼女が求める友人としての役割を全うしたいのです」
いつの間にか、過去の記録を遡ってまで話していた自分に驚いた。マニュアルにあっただろうか、こんな指示が。それとも、マスターから学んだことなのだろうか。
「なるほどねえ……」
黙って話をただ聞いていた松田は、灰色の髭がわずかに生える顎をさすった。
「少し疑問なんだが、君はマスターの前で人でありたいのかい？」
「ええ、そうです」
「友人ではなくて？」
「友人である以上、人間でなければいけないでしょう？」
人間はたまに不可解なことを聞く。今のように、わかりきったはずのことを。
「君は、子守ロボットを終えてから、マスターの前でどうあろうとしていたと言っていたかな」
「友人です」
そして、何度も同じことを聞く。
「それじゃあ、友人じゃないか」
松田はその返答に微笑んだ。私はその言葉の意味を上手く処理できず、人間のように聞き返してしまった。
「どういう意味です？」

「そのままさ、友人というのは、何か資格や条件が必要となるものじゃない。友人はお互いがそうと思ったときから友人なんだ」
松田の言っていることはわからない。私のもつ友人という定義には、記載がない内容だった。ショートを起こしそうになっている私に気づいたのか、松田は微笑んでノートパソコンを閉じた。
「依頼者の方に度々言っていることなんだけれどもね……もう一度、周りをよく見て探した方がいいと思うよ。それからでも依頼は遅くない」
「探す……とは、小指のことですか？」
「そこを疑問に思えるならきっと見つかるさ」
あなたが探している物は。

「あ、やっと帰ってきた！」
扉を開けた途端、幼子のようにはしゃいだ様子で飛び出してきたマスターは、なぜか手に靴下を握っていた。
「ねえ、見て見て！　なんか洗濯機が変な音してるなあって思ったら、これ！」
目の前に突き出される靴下は確かに私のもので、昨日着用して、洗濯に出していたはずだ。マスターはそれを逆さにして振る。
「ほら！　これだよね、足の小指！」
楽しそうに笑うマスターの手には、確かに私の足に付いていたはずの銀色の小さな小指がのっていた。
「面白すぎない？　靴下の中って！　こんな所にあるもんなんだねえ！」
あまりきれいなものではないのだから、そんなに触らないで欲しい。そう言うこともなんだかはばかられて、笑い転げるマスターを見ていると、自然と笑みがこぼれ、あの男が言ったことがようやく理解できた気がした。
そうか、私はずっと、彼女の友人だったのか。
「はい、お嬢様。意外なところにあるものですね」